教育に関するアンケート集計結果

全学類・専門学群代表者会議
教育環境委員会　竹下宏紀

1．アンケート概要

このアンケートは 2018 年 2 月初旬に行ったものである。学類ごとに全代会座長団に配布・回収を依頼し、これを教育環境委員会で集計した。そのためアンケートの実施状況は学類ごとに異なり、各学類で実施した日時は異なる。アンケートはマークシート方式を採用して行い、全代会のスキャナーで読み取った画像データをソフトウェア「マークシート読み取り君 3」を利用して集計した。このため、元データには集計の際に読み取り誤差が出ている。誤差の大半は読み取り不能とされたものであり、無効な回答を読み取ったものもわずかに存在する。全体の有効回答数は 415 であった。

2．アンケート結果

2. 1. 問 1「自身が受講している講義において以下のような講義は存在しますか。“はい”と答えた方は下の括弧内に、その講義の科目名を正確にお書きください。」

物理 2 年は半分以上、生物 1 年は 3 分の 1 以上、人文 1 年・化学 1 年では 4 分の 1 が遭遇している。全体でも 4 分の 1 がほどがこのような授業の存在を認識している。

2. 2. 問 2「以下の講義に対しどのようにお考えですか。・初回に出席しなかった場合、履修放棄とみなすという講義・初回も出席点をカウントする講義」

物理 2 年半分以上があっても良いまたはどちらでも良いと考えており、このような授業を問題視する傾向が低い。他の学類ではいずれも半数以上がこのような授業をなくして欲しいあるいはどちらかというとなくして欲しいと回答しており、このような授業を問題視している。

2. 3. 問 3「講義の受講に際してシラバス(kdb)を参照していますか。」

数学 1 年と 2 年、化学 1 年では半数以上が参照していない。全体でも 6 割ほどにとどまりシラバスの利用が徹底しているとはいえない。このことから、シラバスに出席が履修条件であることなどを掲載しても気づかないことが多いと考えられる。

2. 4. 問 4「3 で“参照している”と答えた方に聞きます。シラバスにこのような記載があることを知っていますか。」

知っている、という回答が知らない（気づいていない）という回答を上回ったのは、数学 1 年と 2 年、人文 1 年、生物 1 年であった。障害科学 1 年ではほぼ同数であった。工シス 1 年、生物資源 1 年、化学 1 年、地球 1 年では知らないという回答が上回っている。

2. 5. 問 5「3 で“参照している”と答えた方に聞きます。シラバスに記載が無いにもかかわらず初回授業の履修を必須とする講義に対してどのように思いますか。」

数学類 2 年は低く、化学類 1 年もやや低い。このうち化学類 1 年は母数の少なさを考慮すべきである。他の学類はいずれも 8 割近く事前の告知を必要と考えている。授業の出席は当然のことだが、履修申請期間が存在する以上は事前の告知も当然すべきものである。

2. 6. 問 6「3 で“参照していない”と答えた方に聞きます。シラバス以外にこのような履修条件を通知する方法は必要ですか。またそれはどのような方法が良いですか。」

全体のみ　Kdb を参照していない学生の間では、manaba のコースニュースに表示して欲しいという要望が最も強い。コースニュースはメールで連絡されるためではないか。Kdb の活用を普及させることも重要だが、平行して他の連絡手段の利用を検討しても良い。

2. 7. 総括

今回のアンケート結果から、学類間で問 1 に該当する授業の存在に対する認識が異なることがいえる。しかし、認識の高さとそうした授業を問題と考えるかという意識の程度には関連性はなく、物理学類 2 年のアンケートではこうした授業に遭遇した率が高いにもかかわらず、問題視しない回答が多くあった。一方で実際に遭遇したという回答が少ない学類であっても、こうした授業を問題視しなくすべきという回答が多い学類も存在している。具体的には地球学類 1 年や工学システム学類 1 年、生物資源学類 1 年である。

また、Kdb の利用率が低いため、シラバスに記載を行うことだけでは問題が必ずしも解決しないように考えられる。Kdb の周知徹底とともに manaba へのシラバス掲載なども検討に値するといえる。

3．追加授業調査結果

アンケートの問 1 の記述欄に挙げられた授業については、追加調査を行い Kdb のシ

ラバスに、初回授業の出席に関して記述の有無を確認した。その結果初回出席を授業の履修条件とするものについては、ほぼすべてその旨が記述されていた。しかし、初回授業の出席点を考慮するものについては、大半の授業で記述がなされていなかった。また記述のあるものについても、明確に履修申請期間の出席を点数に含めるかについては指示がないものが多かった。毎回の小テストを課すとしているものも、履修申請期間を考慮しているかどうかは不明であった。

4．結論

以上から初回授業に出席をとり、これを履修条件としたり成績評価に反映したりする授業が明確に存在することが確認された。初回授業に限らず、履修申請期間は、学生が実際に授業を受けて、どういった履修計画を立てるか判断するための期間である。この期間の出席を履修条件や評価の対象とすることは、履修申請期間の果たす役割が薄められてしまう。全学的にこのような授業が多いとは考えられず、また調査範囲の狭さからそのように断定できないが一部でもこのような授業が存在する以上、履修申請期間の存在意義が問われることとなる。もちろん多くの学生が必修科目とする授業に関しては初回出席も当然ではあるが、選択科目として受講するものについて履修申請期間中の出席が必須である、または出席点として有利に働くことは学生の興味・関心に応じた履修計画を阻害すると考えられる。

これらのことから、履修申請期間中の授業（初回と第二回の授業）に出席をとり、これを履修条件としたり成績評価に反映したりすることは出来る限り、取りやめるべきであるといえる。そして、もしこの要望が全ての教員に受け入れられない場合には、Kdb のシラバス、あるいは manaba を活用した告知が最低限必要である。